

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

「半導体」から 「水」へ

～結果を予測して行動する電気職～

半導体と無縁の世界へ

「人工衛星の部品に利用される特殊な半導体の研究をしていました。」

井上は、学生時代、半導体の持つ科学技術の先端性、宇宙の持つ壮大さというイメージから、「カッコよさそう」という思いに駆られ、半導体を専攻した。宇宙空間を行き交う宇宙線と呼ばれる強烈なエネルギーを持った放射線は半導体の性質を狂わせる。宇宙線から半導体を守り、その電氣的性質を地球上と同じように利用できるようにするために、半導体の素材、配合、加工などの研究に明け暮れる学生時代を過ごした。半導体を専攻した級友たちの大半は電機

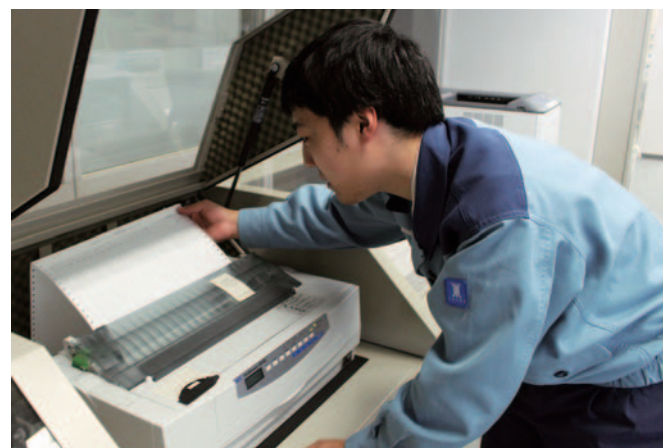


Profile

日吉ダム管理所

井上 友貴 Tomotaka Inoue

平成27年4月、水資源機構入社。最初の配属先が現職。
熊本県出身。映画鑑賞が趣味。ホームシアターシステムでゆっくりとDVDを観ることが最近の楽しみだという。



メーカーなどへと就職した。しかし、井上はあえて別の道へと歩みを進めた。

「水資源機構は明らかに異色な存在でした。」

ある時、求人票を眺めていた井上は、メーカーなどに混じって「水資源機構」の求人目に目がとまった。ありふれた進路に魅力を感じられなかった井上は、聞いたことのない会社を逆に面白そうに感じたのだ。最初こそ興味本位で面接を受けることとなったが、



職員の雰囲気明るさ、話の面白さに接し、水資源機構を選ぶことにためらいは一切なかったという。

見えてきた「意外な共通点」

井上にとって最初の職場は日吉ダム。古の都・京都を洪水から守り、京阪神地域の飲み水を確保する重要な施設である。学生時代とはうって変わり、はるかに大きなダムという巨大構造物と向き合わねばならない。

「ダムのスケールの大きさに、カッコよさや魅力を感じるんです。」と語る井上だが、その日常は地道なものである。土木構造物や機械設備など設備と設備を結ぶ重要な役割を担う電気通信設備は、いざというときに確実に動作しなければならない。これは想像以上にシビアな要求で、常にプレッシャーとしてのしかかる。だから、井上たちは常に点検を怠らない。特に最近の設備は、劣化が進んでも兆候が掴み難くなっていて、予兆なく突然に故障することもあり、油断がならない。だからこそ、五感を駆使して不具合につながる微かな兆候を探らねばならないという。



日吉ダムは管理を開始してはや20年が経とうとしている。「日々接している設備の状態を的確に判断するのが難しいんです。」と語る井上だが、熱、電流、においなど掴みとった兆候を見逃さず、事故防止に繋げてきた。こうした地道な点検こそが人知れず現場を支える原動力となっている。

仕事は、電気通信設備に関わるものにとどまらない。ダム管理で最も重要な仕事である水管理も他の職員とともに携わる。ダムへの流入量、降雨予測などに基づいて、ダム下流へと流す水の量を定める大切な仕事だ。井上はこの仕事を興味深い視点で見る。

「水管理の仕事は半導体の回路と似ている気がするんです。結果などを予測しながらどうすればよいかあれこれと考えるところが、思考、理論展開ともに共通していると思います。そういうプロセスを楽しめる、好きな仕事です。」

これから

春、日吉ダムに赴任して3年目を迎えた井上。1年目は仕事を覚えることで無我夢中だった。2年目は覚えた仕事を創意工夫しながら進められるようになり、少しずつ自らの持ち味を出せるようになった。今年は何を目指すのか。「先輩の知識を吸収しながら、先輩と二人三脚で、愛着ある日吉ダムの特徴を伝える仕事をしたいです。」と語った。

最後に自身の今後について尋ねた。

「水資源機構の電気職がカバーする仕事はすべて経験したいです。今はダムの現場ですが、大きな電気設備を抱えることの多い水路の現場にも関心があります。土木や機械といった隣接分野のスキルも高めたいです。」

多種多様な経験を求め続ける若き電気職・井上。



成長著しい彼が、半導体のように水資源機構にとって欠くことのできない存在となる日はそう遠からじ。今からその日が待ち遠しい。